

日本独文学会  
2020年 秋季研究発表会

## 研究発表要旨

オンデマンド視聴閲覧期間

11月7日（土）～22日（日）

リアルタイム質疑応答

11月21日（土）・22日（日）

参加費：無料

（学生非会員も無料，一般非会員は1,000円 ※要事前申し込み）

オンライン開催

目 次

第1日 11月21日 (土)

シンポジウム I (13:30~14:45) チャンネル1 ..... 5

「詩人たちの時代」の終わり？  
Ende der „Epoche der Dichter“?

司会：益 敏 郎

- |  |         |
|--|---------|
| 1. 神なき時代の「すべてよし」<br>— ポスト・詩人たちの時代とヘルダーリンのパトモス讃歌    | 益 敏 郎   |
| 2. 哲学と詩の縫合を解く<br>— バディウのヘルダーリン論をめぐって               | 林 英 哉   |
| 3. 「詩人たちの時代」のジャンル史論的考察                             | 小野寺賢一   |
| 4. 「固い結合」の美学<br>— ヘリングラートによるヘルダーリンの再評価と文学的<br>モデルネ | 大田 浩 司  |
| 5. 哲学と詩の新たな「縫合」？<br>— バディウ『哲学宣言』におけるツェラン           | 林 志 津 江 |

シンポジウム II (13:30~14:45) チャンネル2 ..... 8

家庭／家族の文学史 — 制度と虚構

Literaturgeschichte der Familie - Institution und Fiktion

司会：吉田 耕太郎

- |   |        |
|---|--------|
| 1. 感情と家庭— そのバリエーションと社会的背景の再考                        | 吉田 耕太郎 |
| 2. 家庭のなかのニヒリストたち<br>— 19世紀の家庭雑誌とカール・グツコー『家のかまどの団欒』誌 | 西尾 宇 広 |
| 3. シュトルムの『白馬の騎手』における家族という幻影                         | 藤原 美 沙 |
| 4. 「家庭」と「家族」をめぐる葛藤<br>— M. ハウスホーファーの作品世界            | 高井 絹 子 |
| 5. ジェンダー規範を（再）構成する場としての家族<br>— イェリネク『スポーツ劇』を中心に     | 福岡 麻 子 |

シンポジウム III (15:00~16:15) チャンネル1 ..... 12

生誕100年〈世界文学〉の中のパウル・ツェラン——その翻訳と受容の多様性

100 Jahre Paul Celan — Zur Vielfalt von Übersetzung und Rezeption im Rahmen der Weltliteratur

司会：関口 裕 昭

- |   |        |
|---|--------|
| 1. ユーラシア大陸の西と東における〈世界文学〉<br>— パウル・ツェランと金時鐘をめぐって       | 細見 和 之 |
| 2. オーシプ・マンデリシタム: 異国語性からの世界文学                          | 斉藤 毅   |
| 3. <第二世代>のユダヤ系作家におけるツェラン受容と展開<br>— ツェランからシンデル、ベッカーマンへ | 福岡 具 子 |

4. 〈死後の生〉あるいはツェラン的言語の系譜 関口 裕昭  
 — ヴィンクラー、ウォーターハウス、多和田

口頭発表：語学／ドイツ語教育 I (15:00~16:20) チャンネル2 ..... 15

司会：西出 佳代／阿部 美規

1. 説明場面におけるドイツ語付加疑問の相互行為的機能についての 木村 英莉子  
 — 考察
2. ドイツ語の授業の反転化による授業外学習時間の確保と学習成果 今村 武  
 の可視化
3. ドイツ語授業における瞑想に対する評価 Luisa Zeilhofer  
 — 学生のアクセプタンスの研究を中心に —

シンポジウム IV (16:30~17:45) チャンネル1 ..... 17

言語を逍遙する詩人、多和田葉子の文学をめぐって

Zur Literatur der Sprach-Wandlerin Yoko Tawada

司会：土屋 勝彦

1. 多和田文学におけるハムレット 齋藤 由美子
2. *Der wunde Punkt im Alphabet*から「アルファベットの傷口」へ 谷本 知沙  
 — 多和田葉子の『文字移植』の翻訳における越境
3. 鏡合わせのテキスト 越川 瑛理  
 — 多和田葉子の『ボルドーの義兄』および *Schwager in Bordeaux*  
 試論
4. 多和田葉子の戯曲 谷口 幸代  
 — *Dejima*から *Kafka Kaikoku, Ein Schmetterling fliegt übers Meer*へ
5. 多和田葉子の小説作品における「語り」について 松永 美穂

口頭発表：ドイツ語教育 II (16:30~17:20) チャンネル2 ..... 21

司会：志村 恵／黒田 廉

1. 日本におけるドイツ語保持の諸相 馬場 わかな  
 — 京都ドイツ語補習教室の試みを中心に
2. 筆記力向上のための短文作成を目的とするマルチリンガル 柴田 育子／  
 ワークショップの効用について Lisa Gayle Bond

シンポジウム V (10:00~11:15) チャンネル1 ..... 23

「オリジナル」とはどのようなことか  
— 近現代ドイツ語圏文学における「複製」の問題圏  
**Was ist ein Original? Problematiken der Reproduktion.**

司会：由比 俊行  
由比 俊行

1. 苦悩する分身  
— クライスト『アンフィトリュオン』（1807）における  
ユピター像
2. 他者の中のオリジナル 藤原 美沙  
— シュトルムの『ドッペルゲンガー』（1886）におけるヨーン像
3. 複製化する非身体としての自己 熊谷 哲哉  
— カール・デュ・プレルのドッペルゲンガー論
4. 複製と歴史— ベンヤミンからグロイスへ 宇和川 雄
5. 「作者」の/と複製— C. J. ゼッツ『BOT. 作者なき対談』を例に 福岡 麻子

口頭発表：文学 I (10:00~10:50) チャンネル2 ..... 26

司会：磯崎 康太郎／宮内 伸子

1. ビューヒナー『レンツ』における近代的自我の歴史哲学的考察 堀田 明
2. ハンス・ハイント・エーヴェルス『フントフォーゲル』（1928）  
における性転換手術について 相馬 尚之

シンポジウム VI (11:30~12:45) チャンネル1 ..... 28

ベンヤミンの経験への問い— 1930年代を焦点に  
**Die Frage nach der Erfahrung bei Walter Benjamin**  
— **Ausgehend von seinem Denken in den dreißiger Jahren**

司会：柿木 伸之

1. ベンヤミンの経験概念 — 変容と回帰 茅野 樹
2. 「洗っていない子どもの手」— ベンヤミンの児童書蒐集 田邊 恵子
3. ベンヤミンのボードレー論とジョゼフ・ド・メーストル 影浦 亮平
4. ミッキーマウスの経験 — 後期ベンヤミンにおける経験概念 竹峰 義和

口頭発表：文学 II／文化・社会 (11:30~12:20) チャンネル2 ..... 31

司会：吉田 治代／名執 基樹

1. Klassiker – New Weird? Komplexe Sprache – Einfache Sprache? Matthias Grünwald  
Fragen zur Literaturdidaktik im japanischen Deutschunterricht
2. ドイツ語圏モダニズムの芸術人形劇 — リヒャルト・テシュ  
ナーを例として 山口 庸子

第1日 11月21日(土)

シンポジウム I (13:30~14:45) チャンネル 1

「詩人たちの時代」の終わり？

Ende der „Epoche der Dichter“?

司会：益 敏郎

2020年はヘルダーリン生誕250周年、パウル・ツェラン生誕100周年、没後50周年として、ドイツ近代詩を振り返る上で記念すべき重要な年である。というのも両詩人の作品は、近代という時代がもたらした危機の所産として、あるいは近代文学が直面した危機を映す鏡として、ともに象徴的な役割を担ってきたからである (Böschstein, 1977; Kocziszky, 2016)。

この二人の詩人をめぐってセンセーショナルな主張を行った思想家がいる。近年日本やドイツでその主著が相次いで翻訳され、改めて注目を浴びているアラン・バディウ (Alain Badiou, 1937-) である。彼は『哲学宣言』(1989年)において、ヘルダーリンに始まりツェランに終わる一時代を、「詩人たちの時代」と呼んだ。バディウの言う「詩人たち」とは、ヘルダーリン、ツェランを始め、トラークル、マラルメ、ランボーなど、哲学者によってとりわけ愛された詩人たちである。ハイデッガーがヘルダーリンに特権的地位を与えたように、「詩人たちの時代」の哲学者は、詩人たちの言葉を時代の危機を啓示する神託のように扱った。ニーチェ以来、哲学者は、詩人に憧れ、詩人たることを切望する。詩にとって危機の時代であったはずの近代は、逆説的に詩の使命が特権化された時代でもあったのである。

しかしここにはもう一つの意味がある。この「詩人たちの時代」という時代区分自体が、この時代が終わったという認識の裏返しだからである——すなわち「ツェランはヘルダーリンを完了する」。ツェランの死を、例えばモデルネの詩的系譜の終焉として象徴的に捉える見方は少なくないが (Theobaldy/Zürcher, 1976; 内藤, 1996年)、バディウはこれをヘルダーリンに始まった時代の終焉とし、この時代を過去のものにしようとする主張するのである (バディウの「哲学宣言」はこの意味で、詩へのフェティシズムを捨て新しい哲学を始めよ、というプラトニック「詩人追放」の要請だった)。

本シンポジウムは、このバディウの「詩人たちの時代の終わり」というテーゼに対し、文学研究の立場から応答する試みである。これはヘルダーリンとツェランをただ回顧的に記念することを超えて、彼らが担った象徴的な意味を再考し、同時に——バディウに抗しつつ——彼らの詩作の現代的な意味を改めて問うことにもつながるだろう。個別のアプローチとしては、具体的なヘルダーリン、ツェラン解釈を通じた、バディウのテーゼへの批判的応答 (益、林英哉、林志津江)、ジャンル史論的観点からの「詩人たちの時代」の検討 (小野寺)、詩的言語に関する別の詩的系譜の可能性の提唱 (大田) によって、発表者は上記の課題を担う。

もちろん問題は二人の詩人に限定されるものではない。「詩人たちの時代の終わり」を問うシンポジウムは、現代における詩の可能性を問う場をさらに開いていくものでなければならない。

## 1. 神なき時代の「すべてよし」 — ポスト・詩人たちの時代とヘルダーリンのパトモス讃歌

益 敏郎

バディウによれば、「詩人たちの時代」を支配していた言説とは、ヘルダーリンが創造しハイデッガーが引き継いだ「詩人たちの神」の言説、すなわち神の不在に対峙しながらも、思考を「来るべき神」による救済の次元に委ねてしまう言説であった (Badiou, 1998)。バディウはこれを批判し、「あらゆる約束と手を切る」思考を要請する。ポスト・詩人たちの時代の詩は、神学めいたニヒリズムに逃避せず、「それ自身の無神論を勝ち取」らなければならないのである。

しかしヘルダーリンの詩を「来るべき神」の創造とするハイデッガー以来の見方は果たして妥当なのか。本発表は彼の後期讃歌『パトモス』に即してこの前提を問い直す。

「危機のあるところ、救いもまた育つ」という言葉がとりわけ有名なパトモス讃歌は、現在の危機から救済の次元へと望みをつなぐ思想を表明した詩とされてきた (Heidegger, 1954; Schmidt, 1990)。しかし注目したいのが、キリストの死を解釈学的に問う中で差し込まれる「すべてよし」という語である。これは聖なるものが滅びるがゆえに、現在が神なき時代であるがゆえに、「すべてよし」とする肯定である。「種蒔く人の一振り」から穀と実が分けられるように、善も悪も、喜びも苦悩も世界に配剤されている。パトモス讃歌はこうした世界をあるがままに肯定する。ここには「それ自身の無神論を勝ち取」る思想、ポスト・詩人たちの時代におけるヘルダーリンの積極的な可能性を読み取ることができる。

## 2. 哲学と詩の縫合を解く — バディウのヘルダーリン論をめぐって

林 英哉

バディウの『哲学宣言』(1989年)によれば哲学は、芸術(詩)、科学(数学)、政治、愛という四つの条件から成り立っている。これらの条件のうち一つにのみ哲学が密接に結びついてしまうことを彼は「縫合」と呼ぶ。バディウが主張するのは、哲学が詩の真理を特権視することで詩に自らを縫合していた「詩人たちの時代」を終わらせることだ。『非美学の小手引き』(1998年)では、真理は出来事によって開始される多様性をもったプロセスであると見なされる。つまり詩の真理を多様な真理のうちの一つととらえ、唯一の真理の存在を否定することが縫合を解くことであると理解できる。

バディウが『存在と出来事』(1988年)で行ったヘルダーリン読解は、ヘルダーリンにおける詩の真理を「ギリシャ的真理」として考える。ヘルダーリンは「ギリシャ的なもの」と「ドイツ的なもの」を対立的に捉え、両者が同時に詩の中に保持されるべ

きだと述べている。詩『あたかも祝いの日に…』はその例として解釈することができる。しかしバディウは、ヘルダーリンの詩を「ギリシャ的出来事」を志向するものとして考え、「ドイツ的真理」を排除し「ギリシャ的真理」に還元してしまう。バディウは縫合を行っているわけではないものの、ヘルダーリンにおける真理の多様性を読み取ることはできなかった。本発表はバディウの議論を基礎に、縫合を解くことに寄与しうるヘルダーリンのポテンシャルを明らかにする。

### 3. 「詩人たちの時代」のジャンル史論的考察

小野寺 賢一

バディウは哲学の詩との「縫合」解除をプラトンの「詩人追放」と重ねるが、その内実は異なる。プラトンが、悲劇をはじめとして、詩文芸全般にみられる「模倣」を批判したのに対し、バディウが挙げる詩人たちはいずれも抒情詩人なのである。このことは、近代以降、個人や自我が重要性を増し、芸術と哲学に共通する関心の対象となったことを意味している。そもそも、「抒情詩」が劇詩と叙事詩に比肩する包括的ジャンルとして定着するのが18世紀のことであるという事実が、事柄の一面を物語っている。その当初、抒情詩は情感の「模倣」を行うとみなされていたのだが、これに対抗するかたちで、抒情詩は詩人自身の情感に基づくとするロマン主義的言説が登場する。本発表では、ヘルダーリンの理論的文書にこの二つの傾向がともにみられることを指摘し、彼の詩学的構想が、経験的自我とは異なる虚構的な「私」の審級を問題とする詩学のさきがけとなったことを示す。次に、同様の試みがモダニズムの詩人たちによってより意識的に課題とされたことを指摘したうえで、こうした詩人たちの営為が、近代的自我の脱構築に挑んだ20世紀の哲学者たちに示唆を与えたという仮説を示す。以上の作業を通じて、バディウのいう「詩人たちの時代」を文学史的観点から捉え直し、これを、包括的ジャンルとしての「抒情詩」の成立から、ツェランの批判によって決定的となった「絶対詩」の終わりまでの期間として描き出す。

### 4. 「固い結合」の美学 — ヘリングラートによるヘルダーリンの再評価と文学的モデルネ

大田 浩司

ヘリングラートは『ヘルダーリンのピンダロス翻訳』（1911年）において、言語それ自体が持つ感性的物質的性質に注目し、ヘルダーリンに独特な詩的言語の運動を「固い結合」と名づけ、19世紀には無視されていたヘルダーリン文学を再評価した。「固い結合」においては、詩の言葉のシンタックスが挿入、倒置、中間休止、句またがりなどによってせき止められることによって語の物質性が際立ち、個々の語が孤立化・断片化しつつ結合する。「固い結合」の異化作用は語を概念の伝達作用から解放し、自立性を獲得した語は慣習的な意味の結び付きから離れた多義性を帯び、日常では持ち得ない強度と創造性を獲得するようになる。「固い結合」の美学は、象徴主義、ダダ、ロシア・フォルマリズムなどとも共鳴しつつ、ドイツの文学的モデルネに大きな影響を与えた。

アラン・バディウは『哲学宣言』(1989年)において、ヘルダーリンに始まる時代を詩人が哲学者の代わりに真理を担った「詩人たちの時代」と規定し、ツェランと共にその時代は終わり、哲学は詩から脱縫合されるべきだと主張する。このバディウの主張からは、理性中心主義へのバックラッシュを読み取ることが出来るだろう。本発表ではヘリングラートによるヘルダーリン論を手がかりにバディウが見落としている詩的言語の運動に注目し、バディウとは異なる視点から文学的モデルネに光を当て、その意義について考察してみたい。

## 5. 哲学と詩の新たな「縫合」？ —バディウ『哲学宣言』におけるツェラン

林 志津江

バディウの『哲学宣言』(1989年)に記された「詩人たちの時代の終焉」というテーゼの背後には、1980年代にフランスから精力的に発信された「哲学的思考の不可能性」、すなわちハイデッガーのナチへの関与を西洋哲学のひとつの否定的な帰結とみなす、自己批判的な哲学の痕跡を見出すことができる。ただしバディウは、上記テーゼに含まれる「ツェランはヘルダーリンを完了する」という挑発的な一文を以て、その潮流に批判的に対峙しつつ、概念規定的な言語による「哲学的思考」の可能性を追究しようとしているようだ。そして「ツェランはヘルダーリンを完了する」と語るバディウの念頭にはおそらく、1967年7月25日に行われたハイデッガーとツェランの「対話」と、その一週間後に書かれたツェランの詩「トートナウベルク」(*Todtnauberg*, 1967)、さらには『哲学宣言』の3年前に発表されたラクー＝ラバルトの論考『経験としての詩—ツェラン・ヘルダーリン・ハイデッガー』(1986年)における「トートナウベルク」の読解がある。本発表では「トートナウベルク」のテキストと、ひいては「対話」をめぐるラクー＝ラバルトの論考にもアプローチすることで、『哲学宣言』におけるバディウのツェラン理解と、上記のテーゼに対する検討を試みる。それは同時に、現在では否定的に捉えられることも少なくない、1980～90年代に興隆したツェランの詩の哲学的・脱構築的読解の再考にも繋がるものと考えている。

シンポジウム II (13 : 30～14 : 45) チャンネル 2

### 家庭／家族の文学史 — 制度と虚構

#### Literaturgeschichte der Familie – Institution und Fiktion

司会：吉田 耕太郎

本シンポジウムの目的は、18世紀から20世紀にいたる文学テクストを考察対象とし、そこでの Familie (家庭／家族) の描かれ方を通史的に考察することにある。現代の私たちが核家族として理解する家庭／家族の形態は、市民社会の成立に伴い、社会の基礎となる共同体単位となり、私たちの社会生活を規制してきた社会制度である。しかし同時に、この家庭／家族は、歴史的かつ文化的に構築された共同体の形態でもある以上、虚構性を帯びていることも無視できない。こうした家庭／家族のありようを、



フランスの社会学者ブルデューは、規制力をもった十分に根拠のあるフィクション、つまり社会生活を習慣化することで人々が積極的に構築する社会制度と論じている（『実践理性』1994）。

こうした家庭／家族の理解を、本シンポジウムは前提とする。つまり文学テクストのなかの家庭／家族は、作品が執筆された時代の制度として通用していた家庭／家族というものから影響を受けているが、それだけでなく家庭／家族を描くことでその制度化の一翼も担っている。その意味で、文学テクストを通史的に検討する本シンポジウムの目的は、18世紀以降の家庭／家族が担ってきた社会的かつ文化的な機能、とりわけ親子関係やジェンダーといった社会規範を刻印する、近代的主体の形成の場としての家庭／家族の歴史的な変化や連続性を明らかにすることにある。

その一方で、*Deutsche Familienromane* (2010)や*Vor der Familie* (2010)といった近年の研究で強調されてきたのが、文学テクストにおける家庭／家族表象には、家庭／家族の内部矛盾や外部世界からの侵食が描かれることで、家庭／家族の虚像を浮かびあがらせる側面もあるという点だ。本シンポジウムの各発表もまた、家庭／家族の内外の拮抗しあう言説に着目し、文学テクストが家庭／家族を虚像として描くことの意味を今日の視点からあらためて問い直すことに重点をおいている。

社会史研究において、家庭／家族の断片化が指摘されるように、1960年代以降、精子バンクや代理母の問題がとりあげられ生殖活動と家庭／家族とは単純に結びつかなくなかった。今日ではさらにグローバル化による世界規模での人的流動化、同性婚の認可運動、移民や難民としての移住といった家庭／家族を取り巻く新たな現象も現れている。そもそも家庭／家族という定義が素朴に信仰され続けており、そこに収まらない共同体のあり方が排除されているという批判も強い。本シンポジウムの議論を通じて、現代の家庭／家族の諸問題に対する文学的な応答の可能性を探ってみたい。

## 1. 感情と家庭 — そのバリエーションと社会的背景の再考

吉田 耕太郎

家庭史・家族史の研究では、18世紀を通じて、恋愛感情で結びついたカップルが、核家族を形成するようになると説明される。本発表は、ゲラート、ヤコービ、レンツ、ゲーテ、シュレーゲルといった18世紀から19世紀初頭に活動した作家の作品から、家庭／家族を描き出した箇所を選び出し、家庭／家族の背後にあるパートナーたちの感情という視点から作品を相互に比較しながら分析する。ゲラートやヤコービは、友情という感情で結びついた家庭を登場させ、現代であれば家庭／家族の成員とは呼ばない人たちからなる共同体を描いている。レンツの作品では、去勢した主人公の結婚というエピソードを描かれ、生殖活動が捨象された純粋に恋愛感情だけで結びつくカップルを異様なものとして描き出している。ゲーテの作品では、愛情による結びつきをカップルが求めることが、死や家庭の崩壊に帰結するというプロットを組み立てて、愛情による結びつきが結婚（家族や家庭）には結実しないことを描いている。シュレーゲルは愛情によって結びついたカップルを描き出すが、この愛情には、愛情による個人の対等な結びつきではなく、女性の男性への服従という不均衡な関係が前提とされている。家庭／家族をつくるカップルの多様な感情を比較することで、家庭／家族

の表象には、恋愛感情にはとどまらない、複雑な感情が重ね合わされて表現されていることを確認する。

## 2. 家庭のなかのニヒリストたち

### — 19世紀の家庭雑誌とカール・グツコー『家のかまどの団欒』誌

西尾 宇広

ウィーン体制下で政治的急進派として健筆を揮った作家カール・グツコー（1811-78）は、三月革命の挫折ののちに家庭雑誌『家のかまどの団欒』（1852-64）を創刊する。19世紀後半に広く普及した同ジャンルの代表格『あずまや』誌（1853-1944）に先駆けて立ち上げられたこの雑誌の創刊の辞では、政治的な主題の拒否による誌面の無害化が謳われており、さながらそこには、かつての批判的作家が公共圏（政治）から親密圏（家庭）へと撤退していく様子が窺われる。ただしこのジャーナルは、実際には当時の社会でタブー視されていた主題に積極的に切り込む記事を掲載するなど（Meinold 2016）、編集者のたんなる反動化の産物だったわけではない。そもそも「家庭雑誌 Familienblatt」とは、私的なものの価値を公共的な地平で産出し、同時に公共的な言論に伴う「匿名性を家族構成員の親密な交流として現出させる」点において、政治と家庭のあいだの不断の交渉を促す触媒であった（Günter 2008）。19世紀に市民的な家族像が存続と解体の岐路に立たされたとするならば（Rast 2018; Eßlinger 2010）、その再編と定着の鍵となったマスメディアこそが家庭雑誌にほかならない。本発表では、近代の「女性解放」の潮流を体現するような女性主人公が、革命を機に「母親」としての役割に覚醒していく過程を描いたグツコーの連載小説『ニヒリストたち』（書籍版 1856）を中心に、家庭雑誌という制度的制約のなかで虚構の物語を通して試みられた社会批判の意義と限界を検討する。

## 3. シュトルムの『白馬の騎手』における家族という幻影

藤原 美沙

テオドア・シュトルム（1817-1888）の『白馬の騎手』*Der Schimmelreiter*（1888）の中心を成す堤防監督官ハウケ・ハイエンの物語は、18世紀を舞台にしていると想定される。しかし、そこでは自立した夫婦と子どもという近代的家族像が描かれると同時に、家庭内において構成員が不可視的に孤立していくという、シュトルムが生きた19世紀という時代に顕著な家族の存続とその瓦解という問題性を読み解くこともできる。シュトルム作品の多くは、家庭を築く前に失敗するという筋書きが多いが（Kugler 2017）、本作においてはそれが克服されつつも、結局のところ、家庭内で構成員それぞれが孤立した状態に陥り、やがては全員が洪水によって命を落としてしまう。こうした展開は家族形態への懐疑と見なすことができるが、ハウケがその後亡霊として作中で語り継がれる点を顧みれば、家族の絆への憧憬と、それを成し得ない個人と社会との軋轢の存在が強調され、また同時にそのような状態に関する再考がうながされているとも捉えることができるだろう。そのために、本発表は、ハウケとその妻エルケのすれ違い、そして精神的に成長しない、彼らの子どもヴィーンケを考察の中心とし、最終的

に手を取り合うことができずに洪水の犠牲となるハウケー一家の幻影が語り継がれることの背後に、家族を良しとみなす社会背景と、それに対する作者シュトルムの抵抗の意識を見出したい。

#### 4. 「家庭」と「家族」をめぐる葛藤 — M. ハウスホーファーの作品世界

高井 絹子

マルレーン・ハウスホーファー（1920-1970）は、第2次世界大戦中ウィーン大学に在籍しドイツ文学を学んでいたが、結婚を機に学業を中断して家庭に入る。その後ウィーンの文学サークルと接触、ハンス・ヴァイゲル、ヘルマン・ハーケルらに師事し作品を発表しはじめた。児童文学に数えられる作品が数篇あるものの、いわゆる主婦作家の手によって描き出されるのは、疑似近親相姦、不倫、夫婦間の不和、家庭生活のストレスからくる心身の不調など、中流家庭の抱える厄介な、そして当事者にとってはかなり深刻な諸問題である。作中の女性主人公たちはこれらの出来事に悩みつつもそれを家庭内のこととして断罪も告発もせずに秘匿する。作家は、結婚生活の苦い現実と同時に、家庭にとどまり続けるための処世術とも見える女性主人公の事なかれ主義を淡々と描き出す。

イルゼ・アイヒンガーやインゲボルク・バツハマンが同じくウィーンで創作活動を開始しドイツの文学市場で華やかに知名度をあげてゆく時代、ハウスホーファー作品の独自性は、家庭の主婦であることを市民生活における存在基盤として手放すことなく、作家としてはその存在基盤を批判的に描く態度から生み出されていると言えよう。

本発表では、ハウスホーファーの作品世界を、50年代60年代における家庭と家族をめぐる言説の文学的一例として考察の対象とする。

#### 5. ジェンダー規範を（再）構成する場としての家族 — イェリネク『スポーツ劇』を中心に

福岡 麻子

ドイツ語圏現代文学において、「家族」を鍵概念とする作品群が一つの趨勢となっているが、その重要な一角をなすのがジェンダーという観点である。本発表では、エルフリーデ・イェリネク（1946-）の演劇テキスト『スポーツ劇』*Ein Sportstück*（1998）を主な例として、ジェンダー規範の再生産の場としての「家族」が文学においてどのように問題化されているか、その一端を示す。

『スポーツ劇』は、1980年代のオーストリアにおける「犠牲者神話」の見直しや湾岸戦争を経て、「戦争の一形態としてのスポーツ」やそれに熱狂する「大衆」を主題化した作品と位置づけられる（Cerny 1998）。とはいえ、この作品はスポーツを擬似戦争として一面化し告発しているわけではなく、集団の分断とそのあいだの「戦い」、身体的鍛錬や英雄への熱狂、そして私的空間と公的空間の交差をめぐるさまざまな言説を、デフォルメしつつ多様な観点から再構成してみせている。

「家族」もまたそれらの観点の一つである。本発表では、作品が描く戦う息子と母親の像（それ自体、一種の古典的形象でもある）を分析し、ナショナルな「戦い」に方向づけられるジェンダー規範、また、その規範を再生産ないし再編成する場としての「家族」がどのように問題化されているかを考察する。

### シンポジウム III (15:00~16:15) チャンネル 1

生誕 100 年〈世界文学〉の中のパウル・ツェランーその翻訳と受容の多様性

#### 100 Jahre Paul Celan—Zur Vielfalt von Übersetzung und Rezeption im Rahmen der Weltliteratur

司会：関口 裕昭

今年（2020 年）は、詩人パウル・ツェラン（Paul Celan:1920-1970）の生誕 100 年および没後 50 年という大きな節目の年に当たる。この数年、ドイツでは新資料の刊行が相次いでいる。2018 年には、初公表の詩を含む詳注付きの全詩集（Paul Celan: Die Gedichte. Neue kommentierte Gesamtausgabe）（2003 年の大幅な改訂版）が、翌 2019 年は、約半数の未公開書簡を含めた 691 通の書簡集（Paul Celan: Briefe 1934-1970）が刊行された。このほかにも、今年に入ってツェランの関連書や研究書は陸続と刊行されつつある。

テキストと資料が整備されて、ツェランの研究は大きく分けて二つの方向に進んでいる。ひとつは伝記的事実や引用の典拠を解明し、作品理解をさらに進めようとする、従来の研究の発展形態である。もう一方は、研究者のみならず創作者をも巻き込んで、さまざまな言語と文化が渦巻く「世界文学」の海に向かって創造的に寄与しようとする方向である。日本では、前者の研究が長く積み重ねられてきたが、本シンポジウムでは、初めて後者の切り口からツェランの詩の本質を解明し、新たな位置づけを試みる。実は「世界文学」は、ツェランがマンデリシタームを通して先取りしたのもでもあり、引用を通して時代を超えたテキストと共鳴している、彼の詩に内在する特質でもあった。

生前からツェランは詩作と並行して、翻訳と精力的に取り組んだ。おもな詩人を上げるだけでも、マンデリシターム、ブローク、エセーニン、シェイクスピア、ディキンソン、ランボー、ヴァレリー、ミショー、シャルル、シュペルヴィエル、ドゥ=ブーシェ、ウンガレッティなど、7 巻本全集（2000）に収められた翻訳詩は、7 か国語から 41 詩人に及ぶ。ツェランの詩にさまざまな言語が響き合っているのはこのためである。

さらにツェランの詩は主要な言語に翻訳され、それぞれの言語空間で多大な影響を及ぼしている。またツェランの詩にインスピレーションを受けた音楽、造形芸術、映画など様々なジャンルの作品は、その多様性において特筆すべきものがある。

ツェランを取り巻く研究と受容は、新しい文学と芸術の流れを生み出し、そのうねりはいつそう太い潮流となって、「世界文学」の海を生成しつつある。

本シンポジウムでは、二つのキーワード「世界文学」と「翻訳・受容」について、それぞれ二人が独自の視点から発表する。まず細見は、ツェランと金時鐘を比較しながら、世界文学における今日的意味について考察し、また二人の詩人の本質を浮き彫りにする。つづいてロシア文学者の齊藤が、マンデリシタームからツェランが受け継いだ「世界文学」とは何であったかについて発表する。福間は、ともにユダヤ系である次世代の詩人と映画監督を取り上げ、ユダヤ的文脈における受容のあり方と今日的意義を探る。最後に関口は、翻訳と深くかかわる、世代も執筆言語も異なる3人の詩人を取り上げ、翻訳が新しい文学の結実にどのように寄与したのかを考察する。

## 1. ユーラシア大陸の西と東における〈世界文学〉 — パウル・ツェランと金時鐘をめぐって

細見 和之

21世紀に入って「世界文学 World Literature」ということがしばしば語られるようになった。デイヴィッド・ダムロッシュは彼の考える「世界文学」の特徴をおよそこう述べている。(1) 世界文学とは、諸国民文学を楕円状に屈折させたものである。(2) 世界文学とは、翻訳を通して豊かになる作品である。(3) 世界文学とは、正典(カノン)のテクスト一式ではなく、一つの読みのモード、すなわち自分がいまいる場所と時間を越えた世界に、一定の距離をとりつつ対峙するという方法である。ダムロッシュは国民文化・国民文学というものを前提にして、その翻訳から生じるものとして「世界文学」を捉えている。

これに対して私は、パウル・ツェランと金時鐘の表現にそくして自分なりの〈世界文学〉を以下のように理解してきた。(1) 世界文学とは、国民文学を脱構築するものである。(2) 世界文学とは、自らの表現言語への違和をそのテクストそれ自体にたえず内在させたものである。(3) 世界文学とは、固有の日付から書かれるとともに、どんなに困難であれ、その日付の抱えている記憶の共有を読者とともに果たそうと試みるものである。

この3つの指標に照らして、20世紀という時代のなかでユーラシア大陸の西と東で達成されたツェランと金時鐘の〈世界文学〉を私なりに考察してみたい。

## 2. オーシプ・マンデリシターム: 異国語性からの世界文学

齊藤 毅

ツェランがロシアの詩人オーシプ・マンデリシタームから多大な影響を受けたことは知られているが、それは彼がマンデリシタームの詩の本質をきわめて的確に理解していたということでもあり、1960年に書かれたツェランによるラジオ・シナリオ『オーシプ・マンデリシタームの詩』は、それをよく示している。ツェランはこのアクメイズムの詩人における語の「現象的」、「開<sup>アクメ</sup>花」的性格を指摘し、それが読む者に「異なる」(fremd)ものをもたらすと述べている。このような、けっして意味により解消

されずに留まり続け、固有の時間性を獲得する語のあり方を、「異国語」的と言い換えることもできよう。そして、みずからの発語が「異国語」的であるという意識は、マンデリシタームにおいて（またおそらくはツェランにおいても）その出自に大きく関わっており、彼の「世界文学」的志向も、まさにそこに由来していると考えられる。こうした観点から、この報告では、ツェランのラジオ・シナリオを道しるべに、マンデリシタームのルーツである沿バルト地方、少・青年時代を過ごしたペテルブルグ、生涯愛したクリミア、1930年代に旅したアルメニアという土地との関わりから、この詩人の創作の「異国語」性と「世界文学」性について検討する。彼の詩作とは、言語的辺境性、異国語性の裂け目からこそ垣間見える「世界」への、一貫した遡行だったのである。

### 3. <第二世代>のユダヤ系作家におけるツェラン受容と展開 — ツェランからシンデル、ベッカーマンへ

福間 具子

本発表では、ツェランの死後、戦後世代のユダヤ系作家たちが、ツェランをどのように受容し、どのように展開させていったのかを論究する。ツェランはその死後もさまざまな言語空間、芸術分野へと受容されインスピレーションを与え続けているが、いまだ開かれたままのショアーの記憶に関わる領域で、彼は直接対話し続けるべき存在と捉えられている。

ショアーの犠牲者、生還者の子どもの世代のうち、芸術作品を通じてショアーの問題、自らのユダヤ人としてのアイデンティティの問題と取り組む人々は<第二世代>と呼ばれ、アクチュアルな研究テーマとなっている。ここではその中でもツェランと関係の深い作家ローベルト・シンデルと映画監督ルート・ベッカーマンを取り上げる。シンデルはツェランと自身が同じ平面上にあるイメージを作り出し、エッセイや詩作で展開しているが、それは彼のツェラン受容のあり方を象徴するものとなっている。ベッカーマンは、ツェランとバッハマンの往復書簡にインスパイアされた実験映画『夢見られた者たち』を制作し、書簡を朗読する俳優の<声>を通じて、彼らに同一化しようと試みる。

ツェランは「他者／異郷」を抱え込んでいたがゆえに開かれた存在であり続け、後継世代の作家たちは、共通性を手掛かりに彼と接続し、同一化を試みる。自明の現象と思われがちなユダヤ系作家にとっての受容だが、そこにある特殊性を本論では具体例に沿って示してゆく。

### 4. <死後の生>あるいはツェラン的言語の系譜—ヴィンクラー、ウォーターハウス、多和田

関口 裕昭

本発表では、ツェランの没後、その影響下に詩作した 3 人を取り上げ分析する。彼らには、二つの言語の境界線上に生き、翻訳を創作と同じ高く位置づけたという共通点がある。

Manfred Winkler (1922-2014) はツェランと同じブコヴィーナに生まれた。1959 年イスラエルに移住し、1969 年ツェランがエルサレムに旅行した際には案内役をつとめた。ドイツ語からヘブライ語への翻訳をしながら書き続けた詩には、ツェランからの引用が多く、敬愛する詩人の難解な言語をかみ砕いて普遍的に表現しようとしている。

英語とドイツ語の二つの言語文化の間で生まれ育った Peter Waterhouse (1956-) は、1984 年、ツェランのユートピアに関する博士論文を提出した。初期の詩にみられる言語実験には、ツェランの影響が色濃い。ウォーターハウスも翻訳と深くかかわっており、ツェランの詩が、類似した音の連想から構成されていることを指摘する。

多和田葉子 (1960-) は早くからツェランの詩に翻訳という視点から関心を寄せていた。「翻訳という門——ツェランが日本語を読むとき」では、日本語に翻訳した時に多くの門がまへの漢字が現れることに着目し、日本語という異文化の境界(門)で初めて現れるツェラン的言語の特質を示した。多和田は今秋、ツェラン受容の総決算として小説 Paul Celan und der chinesische Engel を発表した。糸かけ曼荼羅が Fadensonnen やコロナのイメージに展開していく、この小説の紹介と解釈を本発表でも試みる。

このように三人の文学者は、翻訳と詩作を通して、ツェラン的な言語を、さまざまな言語のせめぎあう、より広い「世界文学」の海へと解き放ったのである。

## 口頭発表：語学／ドイツ語教育 I (15:00～16:20) チャンネル 2

司会：西出 佳代／阿部 美規

(15 : 00~15 : 20)

### 1. 説明場面におけるドイツ語付加疑問の相互行為的機能についての一考察

木村 英莉子

本発表では、ドイツ語付加疑問が説明場面で果たす相互行為的機能を明らかにすることを目的とする。付加疑問とは、発話末に付与され、対話相手からの確認、同意などの反応を要求する不変化詞である (Henne 1978; Zifonun et al. 1997; Kehrin / Rabanus 2001)。コミュニケーション上の要素に左右されずに表出される意味機能として反応要求を持つ付加疑問は、反応要求に加えて、コミュニケーション上で表出される機能 (相互行為的機能) を持つ。本発表では付加疑問が説明場面で果たす相互行為的機能を論じる。なお、説明とは、何らかの事物や経験についての比較的長い語りである。

考察方法として会話分析を使用し、実際の会話データから付加疑問を用いた発話自体の分析を行うとともに、付加疑問の相互行為的機能についての先行研究で論じられていない、同じ説明の行われている発話で付加疑問が使用されていない場合との比較を行うことで、付加疑問の機能を明らかにする。

分析の結果、付加疑問は説明中に、話し手主導の転換の際に使用され、また、対話相手の注意を喚起し、理解を強く求めると明らかになった。この特徴と、付加疑問の意味機能である反応要求の特徴から、付加疑問は円滑な話の運びを行うと共に、協働的行為に志向するという相互行為的機能を持つと論じた。さらに、この相互行為的機能を持つ付加疑問によって、共同性を提示しながら説明を行うという相互行為の形式の一端を明らかにした。

(15 : 30~15 : 50)

## 2. ドイツ語の授業の反転化による授業外学習時間の確保と学習成果の可視化

今村 武

発表者が 2016 年度後期から実施している一般教養の第二外国語としてのドイツ語科目の反転化プロセスを考察し、その方法の変遷・成果・課題を報告する。すでに多くの大学においてほぼ必修の英語はもとより、第二外国語として人気を集める中国語においても授業の反転化は進行している。加えて ICT 化の進む大学の教育環境や、アクティブ・ラーニングを推奨する高等教育の方向性を鑑みても、ドイツ語科目の反転化は学習者と教員双方に有益かつ有効な方策と考えられる。また今般の新型コロナウイルス対策として世界的規模で進行した授業のリモート化に対しても、反転授業は相性の良い授業方策と考えられる。

反転授業を試行錯誤してきた結果、次のような積極的な意義を報告することができる。(1) 予習コンテンツ (ビデオ教材) 作成を通じ、自身の授業を客観的に振り返り、より良い教授法を工夫できる。(2) 授業時に必須の説明事項を授業時間外に置くことで、授業外学習時間を担保できる。(3) 予習成果の提出を必須とすることで、学習成果を同一フォーマットで蓄積 (成績根拠資料として) することができた。以上の成果のほか、学習者が予習を習慣とすることで共通の学習基盤が形成され、対面授業時のアクティブ・ラーニング導入が容易になったことも指摘できる。さらに課題として、反転化で常に問題となるコンテンツ録画のための予算・設備・技術・関連部署の協力、FD 活動との関連性の諸点について諸賢と議論を深めたい。

(16 : 00~16 : 20)

## 3. ドイツ語授業における瞑想に対する評価 — 学生のアクセプタンスの研究を中心に

Luisa Zeilhofer

マインドフルネスの概念は古くから知られていたものの、近年にわかに注目されるようになった研究分野である。マインドフルネスやその実践方法の一つである瞑想は、



リラックスやストレスの低減をもたらすだけでなく、学習の際に重要となる注意力や記憶力などの認知機能にも影響を及ぼすことが先行研究で明らかにされている（Lippelt et al. 2014）。また、瞑想が日本の大学でのドイツ語の学習に与える影響を調べた Zeilhofer (2020) は、1 年（2 学期）の間に、学生を呼吸法で瞑想するグループと音声ガイド付きで瞑想するグループに分け、さらに瞑想をしない第 3 のグループを対照群として実験を行った。成績やマインドフルネスレベルを測定した結果、瞑想グループには、対照グループと比較して成績とマインドフルネスレベルの向上がみられた。さらに、別の調査では 1 学期に限定した期間でも、ガイド付き瞑想の効果がみられた。しかし同時に、これらの効果は、学生が瞑想の実習を積極的に受け入れた場合にのみ得られるものであることも指摘されている（Gryffin 2014）。瞑想を効果的にドイツ語授業に取り入れるためには、アクセプタンスに関する更なる詳細な調査が必要である。そのため本発表では、瞑想に対するアクセプタンスが学生の態度に与える影響を調べるため、ドイツ語の受講者 110 名に 2 種類の瞑想を実施し、それに対する学生の意見を量的および質的側面から調査し、結果を報告する。

#### シンポジウム IV (16:30~17:45) チャンネル 1

言語を逍遙する詩人、多和田葉子の文学をめぐって

**Zur Literatur der Sprach-Wandlerin Yoko Tawada**

司会：土屋 勝彦

排外主義と不寛容が跋扈する現代世界に対抗するためには、共生への希求と実現に向かう越境的な視線と複眼的な思考が求められる。その意味でも多和田葉子の文学が開示する柔軟かつ自由な世界観に着目し議論したい。多和田葉子は、すでに数多くの文学賞を受賞し日独の文学界においてその地歩を固めている作家であるが、2018 年全米図書賞翻訳書部門の受賞により、さらに世界的にも注目される作家のひとりとなった。そこには英語をはじめとする優れた翻訳者の功績も大きいと思われるが、こうした翻訳をめぐる問題意識は多和田文学においても大きな主題のひとつである。これまでドイツ語圏をはじめ欧米において「移民文学」や「越境文学」「異文化間文学」などの枠組みで、多和田文学が議論されることは多々あったが、日本独文学会で取り上げるのは今回初めての試みとなるゆえに、ドイツ語と日本語の両方の作品を扱うことでその意義もいっそう深まるだろう。「エクソフォニー」の文学を提唱する多和田葉子は、常に新たな文学的地平を求め、言語実験・遊戯、自己翻訳、異質なるもの、他者性、語りの輻輳性、変身、シュルレアリスム、フクシマ等々、ジェンダー論からメディア論、環境問題、動物・生命倫理問題に至るまで実に多種多様な主題に向きあう変幻自

在な「移動作家」でもある。世界中を移動しながら、小説、エッセイ、詩、戯曲など多様な文学ジャンルの作品を日独両言語で執筆しつつ、朗読会やシンポジウム、さらには詩的パフォーマンスをも精力的に演じ続けている。

まず齋藤は、多和田のドイツ語の修士論文を取り上げ、ハムレットのドイツ語訳をもとに日独英三言語間の翻訳をめぐる問題性を読み解く。次に谷本は、アンネ・ドゥーデンのエッセイ翻訳をめぐる作品『文字移植』を取り上げ、翻訳が有する根源的問題を考察し、越境的な視座を探求する。さらに越川は、日独両言語作品『ボルドーの義兄』を中心に「自己翻訳」の問題を検討し、作者と翻訳者のヒエラルヒーの崩壊を論じる。それに続いて谷口は、日本の近代化と異文化接触を扱うドイツ語戯曲作品を解釈することによって、多和田のドラマツルギーを解明する。最後に松永は、多和田の語りにおける実験がグローバル化とどのように関わっているか、また他の作家と比較しつつ語り手を無効化する試みを探り、近代文学の脱構築を検証する。このように多和田の初期作品から最新作まで、作品の成立順に発表することにより、翻訳論からドラマツルギー、語り手論にいたる、首尾一貫した多和田文学の問題意識のあり方と特徴を明らかにしたい。また多和田文学の持つ多様性と広がりについても検討することで、ドイツ語圏および日本語圏の現代文学における位置づけについても、さらには世界文学をめぐる議論にも参与しうる視座を探求し、ひいては現代社会の孕む危機的状況に立ち向かう文学の力強いあり方への展望を開ければと願う。

## 1. 多和田文学におけるハムレット

齋藤 由美子

多和田葉子は、1991年ハンブルク大学に提出された修士論文「Eine „Lesereise“ (mit der Hamletmaschine. Intertextualität und Relektüre bei Heiner Müller) の3章で、ヴァルター・ベンヤミンの「翻訳者の使命」に依拠しながら、ハイナー・ミュラーによるシェークスピアの『ハムレット』のドイツ語訳を分析している。本発表では、多和田の分析が『ハムレット』の読みの可能性をいかに広げているのか、および翻訳研究にいかなる示唆を与えているのかを明らかにする。

ミュラーは『ハムレット』を、彼の代表作「ハムレットマシーン」(1977)が成立する一年前にマティアス・ラングホフと共同でドイツ語に翻訳している。この翻訳は、「ハムレットマシーン」とのかかわりのなかで言及されることはあるが、翻訳研究の分野においてまだ十分に論じられていない。

多和田の修士論文は、古典的なシュレーゲル/ティーク訳、フォンターネ訳から当時の新訳にいたるまで先行する翻訳と比較しながらミュラー訳を分析している。ドイツ語や英語を外から眺めることができる多和田によってこの翻訳が分析されている点においても画期的であるが、修士論文は書籍として出版されなかったため、これまでほぼ研究対象にはなりえなかった。本発表では修士論文執筆以後に出版された『ハムレット』の日本語訳やドイツ語訳も取り上げながら、多和田のテキストを読み解きたい。その際、「ハムレット」にかかわる多和田の他の作品も参考にする。

## 2. *Der wunde Punkt im Alphabet* から「アルファベットの傷口」へ

### — 多和田葉子の『文字移植』の翻訳における越境

谷本 知沙

多和田葉子の小説『文字移植』(1993)は当初、「アルファベットの傷口」と題して発表された。このタイトルはアンネ・ドゥーデンのエッセイ *Der wunde Punkt im Alphabet* にちなむものであり、その日本語訳が作中に挿入される。ドゥーデンのエッセイは、キリスト教文化の原風景をなす竜退治伝説の竜を「犠牲者 (Opfer)」と解釈し直すことにより、異物を排除する文化的圧力を可視化しようとする。『文字移植』では、翻訳者の「わたし」がこのエッセイの翻訳方針に逡巡する。というのも、ドイツ語の *Maul/Mund* と日本語の「口」との差異や、アルファベットの物質的側面を無視できず、それが翻訳作業の進行を妨げるからである。

作中に挿入される訳文は、ヴァルター・ベンヤミンの翻訳論で提唱されるような極端な逐語訳である。これが実験的翻訳の試みであることは先行研究でも指摘されてきた。しかし新たな翻訳技法が提示されることよりもむしろ重要なのは、ドゥーデンのエッセイの企図が翻訳の言葉の問題に転化されていることであろう。すなわち、翻訳者が言葉と葛藤する姿を通じて、自明性に潜む異質性へと視線を向ける越境的視座が開かれるのである。本発表では『文字移植』を多和田によるドゥーデン解釈として読み直すことで、翻訳に越境の契機を見出す多和田の試みを浮き彫りにする。

## 3. 鏡合わせのテキスト — 多和田葉子の『ボルドーの義兄』および *Schwager in Bordeaux* 試論

越川 瑛理

本発表は、多和田葉子と「翻訳」にまつわる議論の一環として、日本語とドイツ語でそれぞれ執筆されたテキスト *Schwager in Bordeaux* (2008) および『ボルドーの義兄』(2009) の関係について考察する。その際、両テキストの関係性に対する問いへの応答をおこなう。そして、翻訳論におけるいくつかの重要な論点と接する入り組んだテキストのあり方を紐解き、日本語版に現れる鏡文字を手掛かりとして、双方のテキストの鏡合わせのテキストとしての理解を試みるものである。

ドイツ文学を中心として、比較文学といった研究領域における多和田への関心の高まりは、年々増加するその先行研究をみれば疑いようのないことだろう。しかし、それらの多くは多和田のドイツ語テキストへの言及として偏在しており、より多角的な議論を多和田研究へ促すためには、日本語テキストの状況をも明らかにする必要がある。したがって本発表では、多和田の作家としての執筆のあり方をより広範な点から把握するため、日独のテキストの比較を行い、テキスト同士の関係性を明らかにすることを目的とする。その際、翻訳論でも周縁に置かれる「自己翻訳」というテーマを理論的主軸にしつつ、鏡像への認識がもたらすプロセスを経由し、日独テキストの関係性の解釈をおこなう。

#### 4. 多和田葉子の戯曲 —*Dejima* から *Kafka Kaikoku*, *Ein Schmetterling fliegt übers Meer* へ

谷口 幸代

小説家多和田葉子は戯曲家でもある。ドイツ語でも日本語でも戯曲を創作し、ドイツでは戯曲集 *Mein kleiner Zeh war ein Wort* が刊行されている。収録作はドイツ、オーストリア、日本などで上演されている。多和田研究は小説に重点が置かれてきており、小説、詩、エッセイ、評論、パフォーマンス、インスタレーションなど多岐にわたる活動の中で戯曲をいかに位置づけるかは今後の課題であろう。

そこで、この発表では、多和田の戯曲で幕末から明治にかけての日本の近代化と異文化との接触・衝突の問題がどのように扱われているのかを考察し、戯曲家としての多和田の問題意識を明らかにする一助としたい。

具体的には、長崎の出島を舞台にオランダ人商人と日本人女性の交流を描いた *Dejima* (2007)、カフカの *Die Verwandlung* を下敷きに「開国」をめぐる問題を提示する *Kafka Kaikoku* (2011)、「唐人お吉」と呼ばれた女性の人生に題材を求めた *Ein Schmetterling fliegt übers Meer* (2017) を取り上げ、作品横断的な考察を試みる。

#### 5. 多和田葉子の小説作品における「語り」について

松永 美穂

多和田葉子の 1990 年代後半以降の小説においては、「語り」の方法、とりわけ「語り手」のあり方に大きな変化が起こっている。一貫した語り手を設定して、ある世界を構築し語らせる、という古典的な方法からの脱却が見られるようになった。90 年代半ばには自己翻訳的な要素を持つ創作が多くなってくるが、ドイツ語で執筆された小説 *Opium für Ovid* では、当初一人称の語り手が他の女性たちを紹介していくものの、途中でその一人称が消えてしまう。この現象は、ドイツ語と日本語での同時執筆を試みた *Das nackte Auge* にも見られる。また日本語の作品では、主人公が変身する短編「雲を拾う女」において、一人称の人称代名詞が（ ）に入れられているが、そのことが「わたし」の交換可能性、暫定性を示している。多和田の後期作品においては往々にして一人称が手放されるとともに、作品のなかの「自分」にまつわるアイデンティティも脱ぎ捨てられていく。たとえば『雪の練習生』第二部においては、一人称の語り手が途中で人からホッキョクグマへと入れ替わるが、その流動性は注目に値する。多和田は国家や言語の境界を越える越境作家と称されてきた。しかし、近年ではその境界そのものが流動的となり、登場人物の移動とともに変容していく。語り手の交代や人格の入れ替えはその流動性を象徴している。発表においては、こうした多和田の語りにおける実験を、グローバル化の視点から分析したい。

(16:30~16:50)

## 1. 日本におけるドイツ語保持の諸相 — 京都ドイツ語補習教室の試みを中心に

馬場 わかな

本発表は、京都ドイツ語補習教室 (Deutsche Samstagsschule Kyoto) を事例として、日本におけるドイツ語保持の諸相を解明することを目的としている。

グローバル化が進展する中、国境を越えて移動する大人たちの背後には、彼らに随伴して移動し・させられ、幼少期から複数言語環境で生活している子どもたち(「移動する子どもたち」)が多数存在する。こうした子どもたちのうち、帰国児童生徒を対象とする外国語保持の試みとしては、海外子女教育振興財団(1971年設立)の開設した「帰国子女のための外国語保持教室」があるが、英語とフランス語の授業しか提供されておらず、例えばドイツ語保持を望むドイツ語圏からの帰国児童生徒は対象外である。日本に居住する、ドイツ語話者を親に持つ子どもがドイツ語を継承する場も少ない。現在の日本で模索されている多文化共生社会の実現という観点からみると、「移動する子どもたち」の実態に即した、言語保持教育の十分な機会が提供されているとは言い難い状況にある。

教育は数や効率で議論されるべきものではなく、たとえ少数であっても、「移動する子どもたち」の多様性に鑑みた教育が提供されなければならない。同教室の活動実態や課題を明らかにする作業を通じて、グローバル化がより一層進展する中で今後の日本社会が担保していくべき言語教育のあり方について考察したい。

(17:00~17:20)

## 2. 筆記力向上のための短文作成を目的とするマルチリンガルワークショップの効用について

柴田 育子、Lisa Gayle Bond

日本語を母語とする外国語語学習者が、4技能のうち「筆記力」に特に問題を抱えていることは既に知られている。発表者は、そうしたドイツ語学習者にドイツ語の作文指導をする機会がこれまでに多くあった。ドイツ語新聞への記事寄稿、ドイツ語圏での海外研修の報告書作成(各2000語程度)などであるが、この過程において外国語で文章を書くことについて、さまざまな課題が明らかになった。CEFR A1/A2レベルの学習者がドイツ語で報告書を書くことは難易度が高く、要求するレベルが高くなると、執筆者は外国語で文章を書くことに対して嫌気がさす、という問題点もアンケート結果から明らかになった。また、(1)まずドイツ語で文章を書きはじめる、(2)日本語を書いてからドイツ語を書きはじめる、という二つの方法に関しては、多くの執筆者が(2)を選択していた。一方、ドイツ語で文章を書く前段階の日本語(母語)の文章にも問題点があることも明らかになった。こうした状況を踏まえ、発表者は、まずは

筆記力を向上させるために、短い文章を、日本語・ドイツ語、あるいは既に学習歴がある英語で、つまり「多様な形式でストレスを感じずに書いてみる」、という形式での複数のワークショップを開催してきた。「文章表現講座」、「マルチリンガル俳句ワークショップ」、「200語ドイツ語作文」、「Post für dich!」などの試みである。こうした試みは、それが従来の作文指導とは異なるものであるが故、ある程度の効果をあげることができている。

第2日 11月22日

シンポジウム V (10:00~11:15) チャンネル 1

「オリジナル」とはどういうことか？

—近現代ドイツ語圏文学における「複製」の問題圏

**Was ist ein Original? Problematiken der Reproduktion.**

司会：由比 俊行

唯一無二のオリジナルなものにこそ真正な価値がある——18世紀中葉以来、なかば自明の通念として近代社会を特徴づけてきたこの価値観は、高度な複製技術の発達によって、いま根本的な問い直しを迫られている。W・ベンヤミンははやくも1930年代に、写真や映画といった複製技術がもたらす芸術作品のオリジナルの価値の下落について論じたが、今日の複製技術が投げかける問題は美的生産の領域のみにとどまるものではない。バイオテクノロジーの進歩が生命の複製を現実のものとし、まったく同じ遺伝情報をもった人間＝個人の複製さえ技術的に可能になりつつある現在、ひとりひとりの人間を唯一無二のオリジナルな存在とみなす近代的人間像そのものが、根底から揺さぶられているのである (Fukuyama 2002; Weiß 2009)。

とはいえ、このことはただちに「複製技術によるオリジナルの終焉」を意味するわけではないだろう。なるほど、20世紀以降の高度な複製技術やバイオテクノロジーの発達は、近代的なオリジナル観念の揺らぎを顕在化させることになった。しかし振り返ってみれば、そうしたテクノロジーが発明される以前から、文学の担い手たちは、分身や双子といった複製的存在の形象を通じて、繰り返し「わたし」なるものの唯一性・オリジナリティを問題化してきたのではなかったか (Kittler 1985; Forderer 1999; Fröhler 2004)。そればかりではない。現代社会に目を転じれば、巷には「自分らしさ」や「個性」、「独創性」を称揚する言説が溢れている。複製の氾濫がオリジナルの観念の自明性を脅かす一方で、遍在する複製によってかえってオリジナルの観念が活性化されるという事態もまた生じているのである。

ここから浮かび上がってくるのは、単線的なオリジナル観念の衰亡史ではなく、むしろオリジナルと複製が取り結ぶ相互関係のたえざる変容の過程ではないだろうか。近代的なオリジナルの観念は、複製とのかかわりのなかでいかにして成立し、どのような変化をこうむってきたのか、そしてどこへ向かおうとしているのか？本シンポジウムは、19世紀以降のドイツ語圏文学に描かれた分身や技術的複製のモチーフを手がかりに、このオリジナルと複製の相互関係の歴史の変遷に光を当てようとするものである。第一発表ではクライスト (1777-1811) の喜劇『アンフィトリオン』(1807)における分身のモチーフを、第二発表ではシュトルム (1817-1888) の小説『ドッペルゲンガー』(1886)におけるドッペルゲンガー形象を、第三発表ではカール・デュ・プレル (1839-1899) のドッペルゲンガー論をそれぞれ取り上げ、19世紀初頭から19世紀末にかけての「分身／ドッペルゲンガー」モチーフの多様な展開を跡づける。つづく第四発表では、W・ベンヤミン (1892-1940) の複製論を手がかりに、20世紀以降の複製をめぐる思考の変遷を概観し、第五発表では C. J. ゼッツ (1982-) の『BOT. 作者

なき対談』(2018)を例に、作者論の観点から現代におけるオリジナルと複製の関係性を検討する。

## 1. 苦悩する分身 — クライスト『アンフィトリュオン』(1807)におけるユピター像

由比 俊行

第一発表では、ハインリヒ・フォン・クライストの喜劇『アンフィトリュオン』(1807)における分身のモチーフを取り上げる。分身/ドッペルゲンガーは、ロマン主義文学が好んで取り上げたモチーフであり、クライストの『アンフィトリュオン』も、しばしばロマン主義的な分身文学のひとつに数えられる。しかし、『アンフィトリュオン』における分身現象は、「おのれ自身の一部、あるいはそのすべてが、自我から引き離され、異質なドッペルゲンガーとして固有の生を営むのではないかという不安」(Forderer 1999)の表象としてのロマン主義的分身とはいささか趣を異にしている。クライストにおいて特徴的なのは、アルクメーネを誘惑するためにアンフィトリュオンの分身とならざるをえない神ユピターの苦悩がはっきりと描き込まれている点だろう。ユピターは何よりもまず、アルクメーネにとって唯一無二の存在となることを望んでいるのであり、この自己承認への渴望がユピターをアンフィトリュオンの分身たらしめ、同時に他者の分身としてしか認識されないという苦悩を生むのである。全知全能の神のこのような描き方については、すでに啓蒙主義的な宗教批判の影響が指摘されてきたが(Seeba 1991; Schmidt 2003)、本発表では、近代における「オリジナルな個人」の観念との関係からユピター像を捉えなおし、1800年頃におけるオリジナルと複製をめぐる思考の一端を明らかにしたい。

## 2. 他者の中のオリジナル — シュトルムの『ドッペルゲンガー』(1886)におけるヨーン像

藤原 美沙

第二発表では、テオドア・シュトルムのノヴェレ『ドッペルゲンガー』(1886)を取り上げ、オリジナルが交換不可能なものではなく、他者の中で常に変容しながら、生かされていく点を考察する。

本作は、グリュックシュタットの監獄に収監されていたヨーン・ハンゼンをめぐる物語である。6年の刑期の後、彼は「ヨーン・グリュックシュタット」と呼ばれ、犯罪者の烙印をおされて孤立する。これは市民社会の道德指標にもとづいて作りだされたイメージであり(Segeberg 1992)、分裂の問題が、外部社会との結びつきの中で語られていく。さらに、一人娘のクリスティーネの記憶に残されたヨーン像も「慈愛に満ちた父親」と「暴力的な父親」という二面性を持ち、彼女はこれらを同一人物として結びつけることができずにいる。ここに、偶然にも彼らと同郷であった「語り手」が介入し、彼の「ヨーン・グリュックシュタット」に関する記憶の断片が、クリスティーネとの交流の後、夢の中で再構成されていく。こうして「語り手」によって紡ぎ出された「ヨーン・ハンゼン」像を、クリスティーネは最終的に父親の姿として受け入れることになるのだ。



このことは決してヨーン本人のオリジナリティを保証するものではないが、一人の人間の生が、他者の記憶の一部として受け継がれていく点に、「オリジナル＝唯一無二」という等式の危うさと同時に、語りによる継承の意義が見出されていることを、本発表では明らかにしたい。

### 3. 複製化する非身体としての自己 — カール・デュ・プレルのドッペルゲンガー論

熊谷 哲哉

第三発表では、心霊主義の哲学者カール・デュ・プレルにおけるドッペルゲンガーをめぐる思考をとりあげる。デュ・プレルは、1886年の「ドッペルゲンガー論」において、瀕死状態や無意識状態において出現するドッペルゲンガー現象の証言を多く集め、人間の超感覚的な能力の顕在化であると論じた。無意識への哲学的探究から心霊主義へと傾倒し、ミュンヘンのオカルティストサークルの中心人物として活躍したデュ・プレルは、多くの著作を残しているが、そこには人間の無意識状態における能力の探究、そして人間の進化可能性への期待という一貫した関心が存在していることが分かる。

デュ・プレルは、ドッペルゲンガーに関する考察の中で、瀕死状態や無意識状態において現れる超感覚的な能力の現れとしてのドッペルゲンガーに着目し、これこそが身体と魂、生と死という旧来からの二元論を解消する可能性を示唆する存在であると述べている。また後年の主著『人間の謎』（1892）においては、「ドッペルゲンガー」および「アストラル体」を、地上の生ではなく、彼岸の生を構成し、彼岸の人間である「超越論的主体」の一機能と位置付けている。本発表では、デュ・プレルの思考におけるドッペルゲンガーの性質と、それがどのように人間の身体や魂の機能と関連しているのかに着目しながら、非身体的な、自己の複製である存在が、なぜ本来的な自己として想定されたのかを明らかにする。

### 4. 複製と歴史 — ベンヤミンからグロイスへ

宇和川 雄

第四発表では、複製論の古典とも言われるヴァルター・ベンヤミンの『技術的複製可能性の時代の芸術作品』と、ボリス・グロイス（1947-）によるその新解釈に注目して、20世紀前半から21世紀にかけて、オリジナルとコピーをめぐる議論がどのように変化したのかを概観する。ベンヤミンは1930年代に書かれたその論考のなかで、複製技術が「アウラの喪失」をもたらすことを宣言し、一方で複製技術がコピーを使った「遊戯」と「実験」の可能性をもたらすことを礼賛した。しかしこの主張を、生命の複製が可能になった現代においてそのまま繰り返すことはできない。複製技術が生命の「アウラ」を奪い、生命を「実験」と「遊戯」の対象に変えていることへの批判は、いまだに根強くあるからだ（Birnbacher 2006、藤原 2014）。しかし、グロイスの解釈によれば、複製技術がオリジナルから「アウラ」を——それが存在する固有の場所と歴史的な脈を——奪うのだとすれば、逆にコピーに「アウラ」を与えることも可能である（Groys 2002）。すなわち、「オリジナルからコピーを作る」ことだけではなく、「コ

ピーからオリジナルを作る」ことも可能である。歴史から切り離された存在であるコピーに、歴史的な文脈を付与する方法とは、物語的な「記録」であるとグロイスは言う。このグロイスの解釈を手掛かりにして、本発表ではさらに、ベンヤミンが複製技術時代に「歴史」をどのように考えていたのかを考察する。

## 5. 「作者」の／と複製 — C. J. ゼッツ『BOT. 作者なき対談』を例に

福岡 麻子

第五発表では、クレメンス・J・ゼッツ『BOT. 作者なき対談』(2018)を主な例として、現代の「作者」論における「オリジナル」と「複製」の概念について考察する。

「作者」概念をめぐる議論は、文学研究において大きな一角を成している。「作者の死」(ロラン・バルト)といったタームが登場したのは1960年代だが、インターネットが普及した今日、Wikipedia等の集合的な著者の様態やいわゆる「コピペ」など、「オリジナル」としての「作者」を新たに問いに付す契機は、文学においても主題化されつつある。

『BOT』もまた、ツイッターで多用される自動応答システムBOTを応用している。ゼッツ本人との(架空の)対談を題材としたこの作品では、「コピー」「模倣」のコンセプトの多様な変奏が展開され、インターネットに特有の「作者の死」を示唆するようにも見える。

しかしながら、二次性を露骨なまでに張り巡らせたこの作品は、むしろ作者の「指紋」だらけであることも見過ごせない。本発表では、BOT (Robot) に象徴的な、オリジナルとコピーの特殊な「同居」という様態が作品全体、そして作品の提示する「作者」像を特徴づけていることを示し、「オリジナル」としての「作者」の問題がどのようなアクチュアリティをもって提示されているかを明らかにする。

### 口頭発表：文学 I (10:00~10:50) チャンネル 2

司会：磯崎 康太郎／宮内 伸子

(10:00~10:20)

#### 1. ビューヒナー『レンツ』における近代的自我の歴史哲学的考察

堀田 明

ゲオルク・ビューヒナーは散文断片『レンツ』において、孤独に苦しむ近代人の姿を克明に描いている。とりわけ注目すべきは近代において啓蒙がもたらした理性の偏重と、それが引き起こした知識人の苦悩である。本発表では、レンツと自然との関係に焦点を当てつつ、近代的自我の陥った状態を、人間の自然からの疎外という観点から考察していく。

物語は主人公が森の中を進む場面で幕を開ける。そこでレンツはあたかも自然と一体になるかのような神秘的瞬間を体験するのだが、この瞬間は即座に過ぎ去り、彼は自然からの激しい孤独感に襲われる。このような、近代において自我が世界から疎外された状況を、ゲオルク・ルカーチは『小説の理論』において文学形式との関わりの中で論じている。また、レンツが見せる自然への憧憬からは、啓蒙による理性偏重がもたらした弊害に対する批判を読み取ることができる。そこには、合理主義的志向により歪められてしまった自然の本来の姿を探し求めようとする態度が見られる。こうしたレンツの自我には、テオドール・W・アドルノによる啓蒙の弁証法のダイナミズムが備わっている。

ルカーチ、アドルノによる考察は近代性を主題とした歴史哲学的試みであるが、いずれも理論的範疇にとどまっている。本発表では、『レンツ』に歴史哲学的な考察を加えることで、作品分析の面から、近代において自我の陥った葛藤を明らかにしたい。

(10 : 30~10 : 50)

## 2. ハンス・ハインツ・エーヴェルス『フントフォーゲル』(1928)における性転換手術について

相馬 尚之

本発表は、ドイツ人作家ハンス・ハインツ・エーヴェルス (Hanns Heinz Ewers) の『フントフォーゲル』(*Fundvogel*)における性転換手術について、当時の性科学および生物学からの影響を踏まえつつ論じる。

女という性に倦んだアンドレアは、アメリカ人銀行家の娘グウィネからの求愛を受け、性転換手術により男性となる。両者の恋愛はグウィネの自殺に終わるが、彼(女)は従兄弟のヤンと友情を交わすことに初めて成功する。小説内には、著名な性科学者マグヌス・ヒルシュフェルトが登場する等、当時最新の科学が取り込まれている。これまでの研究は、ナチスに加担した大衆作家のこの作品について、学際的およびジェンダー論的視座から、人体の操作を試みる科学の不遜の戯画化、あるいは男同士の友愛を結末に置くホモソーシャルな世界の理想化を論じてきた。

本発表では、『フントフォーゲル』における「動物」の機能に注目する。動物による生存闘争の原理の導入は男女両性の闘争を示唆するが、ホヤやヒルへの憧れは、「性的中間段階説」を系統発生史的に参照し、「両性具有」を一つの理想として浮かび上がらせる。エーヴェルスは、ヒルシュフェルトおよびエルンスト・ヘッケルの生物学思想を背景に、性転換の実現という人為性の極限を、進化の前段階への回帰を通じて自然化することで揶揄しつつ、アンドレアの性転換を個体発生のやり直しとして描き出したのだ。

ベンヤミンの経験への問い — 1930 年代を焦点に

**Die Frage nach der Erfahrung bei Walter Benjamin — Ausgehend von seinem Denken in den dreißiger Jahren**

司会：柿木 伸之

今年没後 80 年を迎えるヴァルター・ベンヤミンの思考を貫く問いの一つに、経験への問いがある。青年運動に深く関わっていた学生時代の小論『経験』(1913 年) から、『歴史の概念について』(1940 年) の一連のテーゼに至るまで、経験についての省察は、ベンヤミンの著述の軸をなしている。ただし、このことを省みるときに忘れられてはならないのは、彼が『経験』以来、経験を積むことがすでに虚妄と化した状況を見通しながら、「別の経験」の可能性を問うてきたことである。

そのような問題意識の背景に、技術との関わりに起因する人間の経験の歴史的な変質があるという認識は、1930 年代に明確化することになる。亡命の直後に書かれた『経験と貧困』(1933 年) においてベンヤミンは、第一次世界大戦のなかで技術が人類に牙を剥くとともに、経験に乏しくなったことが突きつけられたと述べている。また、『技術的複製可能性の時代の芸術作品』(初稿 1935 年) の議論の前提にあるのも、生活の全局面への技術の浸透による感性的な経験の変質への洞察である。

物語によって伝承される経験は失われ、知覚は秒ごとに寸断された「ショック」への反応と化した。ベンヤミンは、そのような経験の貧困という歴史的な状況を、そこにある「未開の状態」を出発点として経験の可能性を問う。彼は、『技術的複製可能性の時代の芸術作品』などの芸術論では技術との関わり方のうちに、一連のボードレー論においては近代の都市生活の内部に、「別の経験」の可能性を探っている。本シンポジウムは、このような 1930 年代の思考を焦点として、ベンヤミンの経験への問いを四つの視角から検討する。

まず、彼の経験概念を初期からの一貫した思考の歩みのなかにあらためて位置づけたうえで(茅野発表)、『物語作者』(1936 年) で展開される、経験を口承的な物語との関連で捉える視点の源泉を、児童書の蒐集に求める(田邊発表)。そして、ボードレー論におけるジョセフ・ド・メーストルの思想を触媒とした近代の両義性と反転可能性についての省察を検討し(影浦発表)、さらに近代技術の力に曝された大衆が、技術を介して新たな経験の主体として自己を組織化する可能性を探るベンヤミンの思考の意義に迫る(竹峰発表)。

こうしてベンヤミンの経験の問いの源にある思想の重層性を踏まえつつ、この問いの射程を測る本シンポジウムは、節目の年に彼の著作を読み直す可能性を探るものである。1930 年代の彼は、孤立した人間の断片化した知覚体験が、ファシズムによって技術を駆使して組織化されようとしていることを見据えながら、経験へ問いを差し向けている。このような彼の経験についての省察には、パンデミックが「インフォデミック」と化す状況と、そこにある情報への反応を技術の力で動員しようとする企図を見通し、現代の経験の貧困を生き抜く思考の手がかりが含まれているにちがいない。

## 1. ベンヤミンの経験概念 — 変容と回帰

茅野 大樹

本発表は、ベンヤミンの初期から後期のテキストに頻出する経験概念の意義を再検討する。ベンヤミンは 1910 年代に、カントの経験概念を批判的に乗り越える哲学の構想を表明していたが、30 年代にはこの未来の哲学への言及は途絶え、20 世紀の技術によって到来した新たな経験の意義を論じるようになる。本発表は、主要な先行研究において初期から後期への「パラダイム転換」(Thomas Weber, 2000) と見なされてきた経験概念の変遷の内に、なおも一貫する共通の問題構造を見出すことを試みる。

初期と後期の経験概念の第一の共通性は、両時期において経験の価値低下が問いの出発点となっていることである。初期カント論における、経験の数学的・物理学的な原理への還元に対する批判は、『物語作者』で指摘される、近代戦争による経験の物量化の問題を先取りしていると考えられる。第二の共通性は、身体を伴う自我意識に立脚した経験概念の問題である。初期カント論が、カントにおける肉体的・精神的な自我概念の克服を目指していたのに対し、『経験と貧困』は人間の身体を介した経験の消滅によって到来した、新たな未開状態の意義をシニカルに語る。つまり両者はちょうど逆のベクトルから、肉体的自我に基づいた経験とは別の経験の可能性に触れていると思われる。ここから本発表は、後期ベンヤミンの経験概念の内に、初期に構想された未来の経験概念が歪められた形で回帰した姿を読み取る可能性を提起したい。

## 2. 「洗っていない子どもの手」 — ベンヤミンの児童書蒐集

田邊 恵子

カール・ホブレッカーの児童文学史『古い忘れられた児童書』(1924年)に代表されるように、それまでサブカルチャーとして扱われてきたドイツの児童書は、戦間期の文筆家たちの関心をひきつけるようになった。204冊の児童書コレクションを有したベンヤミンもまた、ホブレッカーの作品にたいする書評をいち早く発表している。ただしベンヤミンに特徴的なのは、児童書の価値を、文学的・芸術的側面ではなく、むしろ「洗っていない子どもの手がページにつけてしまうような古色」に見出すことだ(書評『古い忘れられた児童書』)。このように、経年による変容を重要視するという点で、彼の児童書蒐集とそれに基づく執筆活動は、のちの「物語」および「経験」概念の基礎を為すものと考えられる。ここで重要なのはベンヤミンが読者=子どもへの省察も同時に展開している点だ。とりわけ、『物語作者』で「子どもたちの第一の助言者」と呼ばれる「メールヒェン」と子どもとの相関関係が、すでにホブレッカー書評で叙述されていることは着目すべきであろう。

以上のことから、ベンヤミンは「経験が貧困化」した時代にあって別の経験の生成の可能性を、児童書や子どもという存在じたいにも見出していたと仮定される。本発表では、ベンヤミンの児童書蒐集および子どもの観察が、1930年代に展開された言説の具体的事例となっていることを示したい。

### 3. ベンヤミンのボードレール論とジョゼフ・ド・メーストル

影浦 亮平

本発表では、ベンヤミンのボードレール論を支えるひとつの軸でありながらもこれまで注目されることが少なかったジョゼフ・ド・メーストルに注目し、その思想との連関を軸にしてベンヤミンの経験概念を検討することを試みたい。

ベンヤミンは『ボードレールにおける第二帝政期のパリ』において、近代を構成する相容れないふたつの要素を論じている。そのふたつの要素とは、ひとつは人間間の相互不信であり、もうひとつは人間間のつながりへの懐古的欲求である。両者はそれぞれ他者なき経験と、他者の到来の経験と捉え直すことができよう。メーストルの「可換性 *réversibilité*」という概念のもつ二重性は、このふたつのタイプの経験の関係を考察する上で重要である。ボードレールはこの概念を、彼の悪魔主義とフランス革命解釈のために受容した。

「可換性」の概念は、悪魔的な状況の徹底化により、反転して救済が実現されるというように事象を解釈しようとするものである。したがって、ボードレールの思想は、他者なき経験の徹底化の末に、反転した形で他者の到来の経験を呼び込もうとした思想であると理解できる。ベンヤミンはこの思想をボードレールから受容した。そのように考えていくと、他者なき連続的な歴史的時間にあって、その歴史の連続性を打破し、他者の到来をもたらすメシア的時間を対置する『歴史の概念について』と彼のボードレール論との関係に対する理解が得られるものと考えられる。

### 4. ミッキーマウスの経験 — 後期ベンヤミンにおける経験概念

竹峰 義和

後期ベンヤミンの経験概念を語るにあたっては、「経験と貧困」(1933)を避けては通れない。そこでは、第一次世界大戦を契機とする人類の経験の貧困化と、それともなう新たな未開状態の到来について記述されている。ただし、このことは、後期ベンヤミンが経験概念を完全に清算したことを意味してはいない。たとえば、「技術的複製可能性の時代の芸術作品」では、「伝統的な経験の基盤」が「アウラ」だと規定されながらも、その一方で、プロレタリアートがみずからの「労働の経験」について語るようになったことが、大衆の自己組織化の先駆として捉えられている。また、「ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて」(1939)では、大都市交通がもたらす「ショック」が「触覚的経験」と言い換えられている。つまり、後期ベンヤミンがモダニズムやテクノロジーについて考察するとき、そこでは同時に、近代における新たな経験の可能性について思考することが問題になっているのである。そこで鍵となるのが、ミッキーマウスという形象である。ベンヤミンにとってミッキーマウスとは、新たな経験の主体のモデルにほかならないのである。

本発表では、「経験と貧困」と複製技術論文におけるミッキーマウスという形象について考察することで、経験の凋落後における経験の可能的様態をめぐるベンヤミンの思考を再構成したい。

(11 : 30~11 : 50)

### 1. Klassiker – New Weird? Komplexe Sprache – Einfache Sprache? Fragen zur Literaturdidaktik im japanischen Deutschunterricht

Matthias Grünewald

Ein zentraler Aspekt bei der Literaturplanung im Deutschunterricht ist die Frage, welche Literatur in welcher Form behandelt werden soll. Verteidiger von literarischen Klassikern und Vertreter neuerer literarischer Genres – Stichwort New Weird – stehen sich dabei meist polarisiert gegenüber. Im Vortrag wird die These vertreten, dass besonders beim Literaturunterricht mit jüngeren Menschen, wie er im japanischen Universitätskontext gegeben ist, eine Verschränkung der beiden Positionen erforderlich ist. Bieten Klassiker oft eine zeitübergreifende Thematisierung von Grunddaseinsfragestellungen wie Liebe, Tod oder Heimat, so liefern neuere Werke eine andere, zeitlich gebundenere Aktualisierung individueller und gesellschaftlicher Themen. Angesichts der im japanischen Deutschunterricht begrenzten sprachlichen Rezeptionsmöglichkeiten stellt sich jedoch die Frage, ob sie in der Originalfassung nicht zu schwierig sind. In dieser Hinsicht ist die Einbeziehung von Literatur in sogenannter einfacher Sprache bemerkenswert. Reduzierte Buchfassungen werden in den letzten Jahren zunehmend von Verlagen angeboten. Es wird die These vertreten, dass es für den japanischen Sprachunterricht auf eine geschickte Verzahnung ankommt. Eine Option zur Sensibilisierung für sprachliche Formen wäre der Vergleich von Textausschnitten aus einem Original mit einer Version in einfacher Sprache. Auch die Eigenanfertigung von Versionen in einfacher Sprache wären lernfördernd. Möglichkeiten der Nutzbarmachung der Differenz zwischen Original- und Adaptionenformen sollen an Goethes `Werther` verdeutlicht werden.

(12 : 00~12 : 20)

### 2. ドイツ語圏モダニズムの芸術人形劇 — リヒャルト・テシュナーを例として

山口 庸子

ドイツ語圏モダニズムの文学、演劇、映画、造形芸術には、多くの人形表象が認められる。しかし同時代に成立した芸術人形劇が、モダニズムの人形表象という枠組みで研究されることは稀であった。また、容易に触知し操作できる媒体である人形を用いた劇が復興した背景には、社会における身体像の揺らぎ、特に「人間」と「モノ」との関係の変容があったと考えられるが、このような観点から芸術人形劇が検討されることもほとんどなかった。

そこで本発表では、ウィーンで活躍した著名な人形遣いであるリヒャルト・テシュナーを例として、モダニズムの芸術人形劇の具体的様相を分析することを考えた。ウィーン演劇博物館における大規模な展覧会のカタログ（2013）や Timpano（2017）など最近の研究によって、書簡や舞台装置、人形、評論などの資料が明らかになりつつあり、テシュナーの人形劇の歴史的文脈およびその実践を分析する基盤が整って来たことが理由である。本発表では、まずモダニズムの芸術人形劇について概観を述べた

い。次に、最近の研究に基づき、テシュナーが、ウィーン・モダニズムの文学や絵画、工芸、舞踊、などと様々な接点を持っていたことを示したい。たとえば、テシュナーは、クリムト周辺のサークルに属し、ウィーン工房で働いた経験もあり、ホーフマンスタールの『痴人と死』の人形を製作し、モダンダンスの舞踊家たちとの交流もあった。最後に、彼の人形劇について、特にその身体性の問題に注目して分析したい。